

平成 20 年度スタンフォード研修報告

東京慈恵会医科大学附属第三病院 澁谷 一敬

1. 参加した目的とその成果

最先端の施設では実際どのような研究が行われているか、また、今後の画像診断の方向性を実際の目で見て確認したいと思い、研修に参加しました。私の目を見たスタンフォード大学の研究内容、施設環境は度肝を抜かれるほど素晴らしいものでした。特に印象に残ったのは、大学、病院を運営していく上での資金面での裕福さです。医療制度の違いはあるかもしれませんが、米国人の医療への関心の強さがすべての面に現れていると感じました。また、講義を受講する際に、質問事項があれば必ず英語で質問する、ということを目標に参加しました。私の英語力はかなり低く、人前で話せるようなものではありませんでした。無理矢理でも積極的に話してみることで、少しずつですが自信になり、今後に生かせる良い経験になったと実感しております。

2. 日本と米国の放射線技師制度の違いをどのように感じたか

日本の技師制度と大きく異なることは、それぞれのモダリティ毎に国家資格があるということです。それによって専門性が高まり、そのモダリティにおける理解度が高まるということが利点だと思います。また、米国の一定年で技師資格の更新があるという環境は、目まぐるしく発達していく医療機器を扱う我々放射線技師にとっては必須ではないかと感じました。疑問に思ったことの一つとしては、MRI においてシーケンスを変更できないなど、業務を行う上での制限が数多くあることです。一端を見た限りですが、どうすればよい臨床画像を提供できるかなどと自ら考え、発想する環境が無いように見え、仕事に対するモチベーションをどのように保つのかと疑問に感じる点もありました。反対に、日本の環境での利点は、多くのモダリティを経験することができる環境があるからこそ、モダリティ間の比較を行いながら、より一層臨床への理解も深まっていくのではないかと考えます。あらゆる面での線引きがなく創意工夫ができる環境、それこそが日本の技師環境の利点ではないかと考えます。ビジネス社会と同じように米国に習い、同じ道を辿るのではなく、現在の日本の技師環境の利点を生かしつつ技師制度が成熟していけば、世界をリードできる環境が出来上がるのではないかと感じました。

3. 今回の研修で得たことを今後どのように生かしたいか

スタンフォード大学の研修では、世界においても最先端の研究、施設を目の辺りにすることができ、特に、自分が日本で研究、業務を行っていく上で、常に最先端の情報を入手しながら取り組むことの重要性を痛感しました。その中で、日本の環境だからできること、自分が従事している病院の環境だからできることを常に念頭に置き、今後に生かしていきたいと思えます。

最後になりましたが、スタンフォード大学、日本放射線技術学会関係者の皆様、GEYMS の皆様、島根大学の内田様、松原馨技師長を始めとする東京慈恵会医科大学第三病院の皆様に感謝いたします。



写真:スタンフォード大学 Michael Moseley教授
7T/MRIを体験して